



古藤典子(ことう・のりこ)は1954年浦和市(現・さいたま市)生まれ、1979年、武蔵野美術大学大学院修了。1976年から様々なグループ展に参加、個展は1986年から、主にギャラリー現で開催していた。19回目を数える今回が、ステップスギャラリーでは初の個展となった。古藤は今回、《渚のアポリア》(紙|木|グラフィトクレヨン|グラフィトペン|アクリル|鉛筆)シリーズを画廊内に5点、《夜明けの晩》(紙|アクリル|色鉛筆)シリーズを入口と事務所に計5点、展示した。二つのシリーズは似て非なるが、重層的に物事を捉える点では同じだろう。様々な矩形を組み合わせる《渚のアポリア》シリーズは、確かにこれまでの現代美術の歴史で類似する作品を見つけることはできるであろう。しかし、もし画面に木が描かれていたら、それは既に美術史の中で誰かがやっているという会話にはならない。類似などないのである。今回の《渚のアポリア》シリーズを見てみると、何故か襖や畳、引き戸などの、日本家屋を思い起こす。古藤が生み出す色彩は黒と白の単純な世界観ではなく、濃い薄い、光を反射する/しない、といった技法だけではなくクレヨン/ペン、アクリル/鉛筆、紙/木の素材が影響する。そのため、多種多様な複雑な色彩が存在し、互いに呼応しあっているのが、良い意味で曖昧な色が生まれる。人間は色彩を比較で認識するので尚更だ。曖昧な色彩を有機的な視線で追っていくと、形が溶解していく。

するとハードエッジの作品に、途端に柔らかく複合的な表情が浮かび上がってくるのだ。シャープな色と形だからこそ、この見解が余計強調される。呼吸する作品とでも言うべきか。恐らく場所の問題だけではなく、その瞬間毎に、《渚のアポリア》は変化を続ける。「アポリア」とはアリストテレス哲学で、一つの問いに対する答えとして相反する二つの見解が等しく成立する場合をさす。波が寄せる所である「渚」もまた、同じ形象は絶対に生まれえない。常に矛盾に満ちていることこそ、現代美術の発想では不可欠なのである。このように見えるのは、当然のことながら、作品の展示方法にもあろう。「インスタレーション」や「もの派」的のサイトスペシフィックという形式的に廃れた発想ではなく「ではここでそうしよう」という閃きという名の閃光が、古藤の作品を支えているのではないか。このような発想で《夜明けの晩》に視線を向けると、《渚のアポリア》のような複合的な素材を用いずシンプルに描かれているとしても、《渚のアポリア》同様の、多義的な思想を読み取ることができる。ここにミニマルの思想は存在しない。自己を主張し他者を尊重する姿勢が伺えるのだ。古藤の作品は新鮮で、加工するのではなく刺身のように生で味わいたい。そのためには、我々が知識や固定概念を捨てて、常に、新たな眼差しを備える必要がある。

